



「次男のおかげで、助けられた」

—今年の二月に、NHKの「エルムンド」(※)に出演された須藤さんの話を聞きました。ものすごく楽しく障害者の生き方を語ってくれましたね。

軽薄にね(笑)。

—障害者を「ファッション」をテーマに話すなんて、カッコいいなあ。ぜひ、お話をうかがいたい、と思いました。

いやいや、カッコ悪いですよ、僕。

—いやあ、須藤さんはカッコいい。副店長にまで昇進されて…。ビジネス人生も満たされていたじゃないですか。

丸井に拾っていただいたんですけど、どうしても宣伝の仕事がしたくて。当時は広告にお金をかけているように見えました。八〇年代に入社する一万人の社員は、ほとんどがそういう華やかな仕事を志望していましたね。

狭き門じゃないですか。だから目立たなくちゃと、最初に配属された靴売り場で、当時全社員に課されていたエアコンの拡販で、初年度に二三十売って、ナンバーワンになったんですよ。そうすると広報室が来るじゃないですか。社内報で「恐ろしき新人社員あらわ

連載

ぶっちゃけインタビュー

ネクスタイド・エウオリュション

須藤シンジさんに聞く

3

## 「ファッション」は、 障害を超える

脳性マヒの次男の誕生で、

須藤シンジさんは、

新しい人生を発見する。

障害者だけが障害を持っているのではないことにも気づく。

意識のバリアを、カッコよく壊す。

日本を変えるのは、たいへんだけれど、

まず、「渋谷」から変えようと動き出した。

る！」と取り上げられて。その時に「広報室って宣伝の近くですか、推薦してくださいよ」と言い続けたんです。

—副店長から店長の道を歩まず、退職して独立されたわけですね。それは、次男が生まれたのがきっかけですか？

間違いないです。彼のおかげで助かったって感じですよ。

—助かった？

—そうです。次男が、新しい生き方を教えてくれました。

だって、それまで、社会的な名声と金銭を得ることイコール成功だ、と思ってきたんですから。それ以外の人生は、まったく見えなかった。

僕は、サラリーマン時代、実際に年齢だけで見れば高額な年収をいただいていたし、将来目指すべきは役員かグループ会社の社長かなどと考えて生きていました。

—その生き方を、息子さんが捨てさせた。

—一九九五年に次男が生まれた。脳性マヒで、歩けない。それどころか動けないかもしれないと医者から言われた。

—周りも「ダメ」と思ったら、きつとこの子は本当にダメになるな、僕は直感的に思いました。だけど、理屈では